

## アヴェ・ヴェルム・コルプスについて的小論文

Jean Lauand

ジェアン・ラウアンド<sup>1</sup>

広瀬昭壮 (訳)

**概要:** 中世において最も美しいと言われる宗教詩「*Ave verum corpus natum*」について一筆。

**キーワード:** アヴェ・ヴェルム・コルプス、中世の詩

**Abstract:** a comment on Mediaeval poem *Ave verum corpus natum*.

**Keywords:** *Ave verum corpus natum*. Mediaeval poetry.

中でも最も美しい中世期の宗教詩と言われるアヴェ・ヴェルム・コルプス (*Ave verum corpus natum*) について一筆。穏やかで伝統的なグレゴリオのメロディーのほか、モーツァルト、シューベルト、グノーやその他多くの作曲家の楽曲を受けてきたこの詩は、おそらく、14世紀の匿名とされている。

現代に受け継ぐ伝統的なミサ、典礼様式に含まれている詩の一行を最初に調べることから、幾つかの気がつく点を挙げたい。それらを、史料批判から示されている疑問と照らし合わせることによって、原文のテキストを取り戻す事が出来る為に役立てればと願っている。

それはわずか5句の短い詩である。しかし神学的に深い意味を持っている。つまり、言葉 (ヴェルブム) が神として受肉、受難、聖餐の奥義を称える賛歌である。今日公式に歌われているバージョンは以下である。

*Ave verum corpus natum de Maria Virgine  
Vere passum, immolatum in cruce pro homine  
Cuius latus perforatum fluxit aqua et sanguine  
Esto nobis praegustatum mortis in examine  
O Iesu dulcis, o Iesu pie, o Iesu fili Mariae.*

救いあれ、処女マリアから生まれられた真のお体よ、  
本当に苦しまれ、そして人々のために十字架で受難の犠牲となられたお方、  
貫かれたその脇腹から水と血を流され、  
私達の死の試練を救済の時としてくださるお方、  
やさしいイエス、慈悲深きイエス、マリアの子イエス。

カトリック百科事典のために書いた素晴らしい論文では、イギノ・チェケッティ (Igino Cecchetti) は、多様な変異を表す古抄本 [写本] 資料から浮かぶアヴェ・ヴェルムの原文について挙げられる様々な疑問を以下のように指摘している。

<sup>1</sup> サンパウロ総合大学大学院 (USP) 主任教授。サンパウロ・メソジスト大学院教育学・宗教科主任教授。

第4韻文で、(mortis in examineの代わりに) in mortis examine

第3韻文で、(fluxit aqua et sanguineの代わりに) unda fluxit et sanguine

第5韻文で、(O Iesu dulcis, o Iesu pie, o Iesu fili Mariaeの代わりに) O dulcis, o pie, o Iesu fili Mariae

これらの選択肢を前にして原文の姿を調べ続けるならば、以上の最初のバージョンだけがおそらく受け入れられるようだ。つまり、現在歌われているアヴェ・ヴェルムが著者のオリジナルバージョンであり、しかし、それには、第4韻文、mortis in examineの代わりにin mortis examineと交換することになる。

何がこの主張に基づいているか？テキストの内部を分析するさい、本文は中世の執筆の基準で書かれていることを忘れてはいけない。古代の著者は言葉を分離しないで並べていたことは、知られている。そのため次の様な形式で詩が書かれていた。

**A**VEVERUMCORPUSNATUMDEMARIAVIRIGINE  
**V**EREPASSUMIMMOLATUMINCRUCEPROHOMINE  
CU**I**USLATUSPERFORATUMFLUXITAQUAETSANGUINE  
EST**O**NOBISPRAEGUSTATUMMORTISINEXAMINE  
OIES**U**DULCISOIESUPIEOIESUFILIMARIAE

アクロスティック

<sup>2</sup> (折句) あるいは詩の文字を他の方法で整理するのを中世の著者が好む事は、よく知られている(そして、勿論、歌に関する場合は、母音および母音系列が最も重要になる)。

この場合、最初の韻文の最初の文字として、最初の母音“A”、そして、“E”は2番目の韻文の2番目の文字として、さらに“I”、“O”等、第5韻文の5番目の文字として“U”まで、これらのやり方が典型的な例と言える。

このような配置を注意しながら考えていくと、第5韻文に当てる次のバージョン(しかも、説の中でも遅くあらわれたもの) : *O dulcis, o pie, o Iesu fili Mariae* は不要な変形として捨てる事が出来る。

では、さらに自説に入るならば、末端にある“UM”が中世においては“Ū”に省略された語であったことを思い出す必要がある。それでは幾つかの写本にも出てくるこのバージョン : in mortis examine を使って推測してみると :

**A**VEVERŪCORPUSNATŪDEMARIA**A**VIRIGINE  
**V**EREPASSŪIMMOLATŪINCRUCE**E**PROHOMINE  
CU**I**USLATUSPERFORATŪFLUX**I**TAQUAETSANGUINE  
EST**O**NOBISPRAEGUSTATŪIN**M**ORTISEXAMINE  
OIES**U**DULCISOIESUPIEOIES**U**FILIMARIAE

<sup>2</sup> *Acrostichum* 詩の一種で各行の始めの文字またはその中、または始めと終わりで他の語句になる。言葉を織り込む言葉遊びの一種。

この画像で、目立って現れるのは、母音の第2の配置である。このような、A・E・I・O・U のもっともらしい配列が偶然に起こる確率は不可能に近い、一万に一つであろう。

これにより、*unda fluxit et sanguine* および現在の*mortis in examine*を原文である説から廃棄するのに、もっとも妥当と言えるのではないだろうか。上記の転写が恐らく原文のテキストとして検討することができると考えている。たしかに、この仮説は、歴史史料をもって確認を要求する推測である。歴史学すべてに関しては、詳しい調査の上で述べることが不可欠であるように。

Recebido para publicação em 29-04-14; aceito em 30-05-14